帝京大学山梨文化財研究所研究報告第8集（1997）

中世地域社会における村落の考古学的研究

鋤　柄　俊　夫

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．集落遺跡研究の現状と課題
Ⅲ．日置荘村落の空間構造
Ⅳ．まとめにかえて

Ⅰ．はじめに

中世村落に対する文献と歴史地理からのアプローチは、長い蓄積と多岐にわたる内容を有している。地方史研究協議会による中世村落特集での大会討議[1]および小山靖憲氏によるそのまとめ[2]によれば、荘園との関わり、村落内結合および階層と領主制との関係、社会史的方法、耕地および開発と領域・景観などに関する問題がとりあげられ、それぞれの関心と方法によって、その多様なあり方が示されている。

一方考古学の方法で奈良時代以降の村落について研究する場合、その対象は集落が中心とされる。このうち畿内の集落遺跡については、橋本久和[3]・原口正三[4]・奥野義雄[5]氏の研究が緒とされる。そこでは文献と歴史地理の成果による集落内構成員とその立地を前提とした建物群の復原と分類がおこなわれ、集落内部での結合または階層的な問題、および変遷過程が示された。この方向は基本的にその後の集落遺跡研究においても踏襲され、石神怡[6]・坪之内徹[7]・中井均[8]・広瀬和雄[9]氏らによって集落と屋敷地の分類・類型化がおこなわれ、佐久間貴士[10]氏によって建物群と遺跡の消長時期および建物群の集合化（集村化）をもとにした、平安時代以降の変化期の考察がおこなわれた。また中国製陶磁器などを基準に階層（従属）性を検討することもおこなわれている[11]。このようにこれまですすめられてきた畿内の集落遺跡研究は、おおむね建物群の普遍的な類型化による変遷過程と階層性の説明に集約できると言えよう。

しかし広瀬和雄氏も指摘しているように[12]、その前提となった遺構群は、発掘範囲の制約からその集落全体の様相を示しているとは限らない場合が多く、したがってそれによって組み立てられた建物群の類型化が、広義の普遍性においてはある程度の有効性を持ちうる

ことがあったとしても、現実的にはかなり恣意的な解釈を余儀なくさせられている点がでてきていることは否定し得ない現状であろう。

またこれらの方法はひとつには、生産の拡大による一部の農民の成長と集落内構成員の分化を前提とした農耕村落をモデルとしているものであるが[13]、発展段階的な指向の中で普遍化をおこなう前に、資料批判としての立地の検討と地域の特徴も考慮されなければならず[14]、さらに職能民などは農業以外の生産手段をその生業としているものであり、その場合は当然この前提がそのまま採用できるか問題となってくる。

それではこれまで考古学がおこなってきた村落の研究は、その村を遠巻きにして、自らのスコープを通して見えた家の一部のみを観察してきただけだったのだろうか。多様な成果をあげている文献史研究の成果に対して、考古学のおこなっている集落遺跡研究は、はたしてどのように対峙していったら良いのであろうか。

II．集落遺跡研究の現状と課題

考古学がおこなってきた集落遺跡の研究を村落研究の中に位置付けるために、ここではこれまでの成果の中からそれを意識した研究をあらためてとりあげ、問題の結集と視点の整理をおこないたい。

村落を対象とする歴史系研究各分野において、考古学との対照はひとり文献史研究に求められたのではなく、むしろ考古学の方法に最も近い立場として、歴史地理との連携がすすめられてきた。佐久間貴士氏はその立場で集落の類型をおこなった[15]。氏の分類は金田章裕氏の用語[16]と下右田遺跡の整理[17]を参考にしたもので、屋敷地の数を基準に大きくA型（散村＝屋敷地が1ヵ所で孤立）、B型（小村＝10ヵ所未満の屋敷地が集合）、C型（疏塊村＝10ヵ所以上の屋敷地が間に耕地などをはさみながらゆるやかなまとまりを持つ）、D型（集村＝10ヵ所以上の屋敷地が集合している集落）の4類に分けられる。歴史地理の方法は、形態からの村落研究に厚い蓄積を持つものであり、その意味で考古学との方法的共通性に着目し、用語の整理を試みる中でその成果を積極的に取り込もうとした指向は的確に評価されるべきであり、確かに類型とその基準においてこれまでの同研究の中でもっともわかりやすく、特にD型は明らかに他と区別できる形状を示しており、調査の範囲が狭い場合を除き、これまで意識されてきている事例と同様に、概ね共通認識をつくることのできる現象の説明と言えよう。

しかしA型とした長原遺跡の例では、ひとつの坪に2ヵ所の屋敷地があるとしているが、これが同じ屋敷地内での構造を示している可能性も否定できず、またB型とした宮田遺跡は、C型とした横江遺跡の一部を構成した要素と考えることもできるなど、それ以外の類

型については、広瀬氏の整理が示したその限界を超えるものではない。

次いで考古学以外との関わりにおいては最も興味深い議論が中井均氏の論攷の中でおこなわれている[18]。文献史学とあわせて城郭研究者との対比の必要な、いわゆる居館研究である。このテーマに関しては、かつてより橋口定志氏の成果が大きなものとなっている[19]。氏は居館の定義をはじめとし、形態の特徴と意味・変遷から、その視野を村落全体にまで広げ、溝の機能も含めたそのそれぞれについて文献史研究の成果を取り入れた積極的な評価を与えたのである[20]。

中井氏の論は主にこの橋口氏の成果に対するものであるが、氏の論点はその出現時期と性格の２点に絞られる。前者については、橋口氏の主張する14世紀代に対して、西日本における12世紀末の出現を、後者については、溝で囲まれたものが必ずしも居館だけではない可能性を指摘している。現象としての事実がそうであるならば、両者の相違は東西日本における領主層のあり方の違いに求められることも考えられるが、それ以前に両者の「方形館」に対する評価の異なりも感じられるところがある。

例えば、中井氏が12世紀代以前に遡る居館の可能性としてあげている大阪府松原市所在の観音寺遺跡Ｆ地区は古代「居館」の例であり、同様に１町規模で区画される他の例も未だ古代の条里地割に規制された施設との関連について十分な検討を経ているわけではない。当然水藤真氏の成果も考慮されるものであり、それは中井氏が後者で指摘した概念の範疇に含まれる例とも重なる。

また観音寺遺跡Ｂ地区の集落は13世紀代に比定されるが、幅２ｍの溝が堀と言えるかどうかはわからない。さらに日置荘遺跡Ｂ地区の集落については13世紀代に堀（幅6.8ｍ）のあった可能性は少なく、その場合当然土塁も存在せず[21]、同様に様々な区画が面的な広がりをもって多くの溝で構成される姿は、日置荘遺跡では少なくとも12世紀代では認められないのである。

また、居館の性格と役割といった問題については、奈良県法貴寺遺跡の例[22]をみるまでもなく、その中には寺院の存在していたことも明らかであり、日置荘遺跡についても中井氏と別の視点で当初よりその前提はもっていたところではある。しかし発掘成果から居館の主とその性格および機能を特定する作業は従来の資料整理の範疇では様々な評価を生み出すだけの可能性の域を越える状況になく、また寺院の果たした役割についても、多角的に検討する必要を忘れてはならないだろう[23]。

このようにみてくると中井氏の論は、東日本だけではなく西日本においても必ずしも肯定できる点ばかりではないようである。しかし氏の論攷の本質は「城郭研究者の立場から考古学の成果を居館研究に位置付け」ることであり、その新たな視点に学ぶところは今後少ないものではないだろう。

ほかに考古学が援用する資料として絵画資料があり、個別的なその採用が多くみられる中で、坂井秀弥氏はこれらを有機的に活用した集落および地域史の復原をおこなっている。[24]

さて村落に対するこのような考古学の方法に対し、文献史研究の一方では門前や市場・港などに代表される固定的な集落の景観に加え、府中や有力国人の城館などの権力拠点に注目し、様々なそのありかたに検討を加えていっていた。[25]

従来この視点について考古学は不得手な部分であったが、近年荒川正夫・飯村均・柴田龍司・笹生衛・宮瀧交二・斉藤弘・進藤敏雄などの各氏によってこの問題が積極的にとりあげられ、「館」以外にも「宿」・「市」・「津」などといった具体的な性格を町・村に与えた考察が進められている。[26] 飯村氏の論攷に代表されるように、それらはいずれも、掘立柱建物と溝だけではなく、墓・道・方形竪穴・都市との対比など村落を構成する様々な要素を総合的に分析しており、それ故に結論に至る手続きはこれまで以上の慎重さが要求されるものであるが、村落をより具体的に描き出せるものとして、これが次段階の村落研究の大きなテーマとなることは間違いないであろう。ここへきて漸く考古学は村落の中にその足を一歩踏み入れたと言えるのである。

ところで中井氏が最後に問題としている点に居館とそれをとりまく集落との関係がある。氏は「14～15世紀の集村化の結果」によって、近畿地方では中世の村落遺構の多くはほぼ現在の集落の下に求められることとなるはずであるが、実状は現集落から離れた場所で居館跡のみが検出されていることに問題の所在をおいている。

小稿ではここまで村落の変遷とその変化期について触れることを避けてきたが、中井氏が指摘したこの問題は、実は「集村」の意味、村落の移動原理など、まさに村落の変遷とその構造の本質に関わる問題なのであった。

さてこれまで集落遺跡変遷の研究は、一般にその形態の違いに着目した画期の認定を考察の目的としており、その具体例は前川要氏などによって示される集落遺跡の消長表などにもみることができる。[27] しかしそこで言われるところの、いわゆる村落の出現について考えてみると、それらは現象としては確かに突然出現するようであるが、実態としては突然そこに村が発生するのではなく、もちろん中には遠方からの開拓民の例もあるが、[28] 多くの場合は必ずそれまでその周辺にあった村落の人口減か、あるいは何らかの原因による、その中の一部または総体の移動によるものであり、さらにそれらの中には、その移動が古墳時代以来の動向の中に包括されて説明される場合もみられるのである。

すなわちこれら集落遺跡の消長関係で表現される現象は、総て村落の移動によって生じたものであり、したがってその説明は、該当する村落個々にとどまらず、互いに関連し合うその周辺地域全体を取り込んだものでなければならないのである。その意味で集落遺跡の変遷と画期についての問題は、歴史地理の用語に対する概念規定の整理を含めて、この

村落移動の視点での説明をおこなわない限り進展はみられないものと考えられる。

今この問題について明快な論を展開している例は少ないが、矢田俊文[29]・坂井秀弥[30]氏等はいずれも16世紀を中心とした時期の状況として、政治動向と地理的条件から越後におけるその説明をおこなっている。また山川均・石尾和仁[31]氏など農耕を基本とした生業維持の論理の中にその移動の原因を求めようとする視点もみられる。

そしてここで大きな問題となるのは、従前の文献史研究の成果と網野善彦氏の指摘にあるように[32]、中世の村落は農耕民のみによって構成されていただけのものではなく、様々な工人・職人を含み、また農耕民であっても地域と季節によっては、生業を非農業行為によっていた場合がみられる点である。そしてそれら個々の村落はまた決して同じ内容のものではなく、人口も構成も、立地と環境によってはその主たる生業も異なっていたのである。

さらに視野を地域に広げれば、これらの村落は、それらを有機的につなぐなんらかの利害関係の下で、そのそれぞれの個性にしたがって、地域全体に調和のとれる適切な役割を果たしていたと考えられるのである。この状況は中世において当然安定期と変化期を繰り返すことになるが、変化期をみればその原因には、外的要因としての例えば支配体制の変更、内的要因としてはなんらかの紐帯の崩壊が当然予想できるものと考えられる。

したがっていわゆる集落変遷に見られる画期は、このように多様な価値観をもった村落に対する地域全体の動向の中でおさえられるべきであり、その結果である個別の集落形態だけをみていたのでは、本来あったはずの変革の意味を見失ってしまう危険性をはらんでいるのである。

この状況下において、これまで考古学がおこなってきた集落個々の普遍的な類型化作業とその変遷過程の整理は、この多様な実態に対応するには、未だ手続きが不足しているものと言わざるをえないことになる。

その意味で先に述べたような東日本の近年の動向は、この状態からの脱却のひとつの試みであり、今後の展開が期待されるところである。さらに居住域・耕作地・葬地・共有地とされる村落の領域全体を視野に入れて[33]、その中で村落の構成員の仕事を想定し、再生産の手段と方法と結果をシミュレートする過程で、必然的に生ずる集落の移動とその結果生じた村落形態の変化をその村落が存在した地域全体の中で考えるならば、考古学は今以上に中世村落の実態に近づいていくことができるのではないだろうか。

集落の発展段階的なプロセスを個別実証的に説明する方法も重要ではあるが、それ以上にその村落が地域全体の中でどのような社会存在であるのかを見極めた、集落の質的な分析の深化が今後強く望まれるところであろう[34]。

そこで考古学の方法で検討すべきこの内容と類似した文献史研究の立場を探すと、そこに木村礎・原田信男氏による景観復原的考察がある[35]。この方法の特徴のひとつは、マクロ

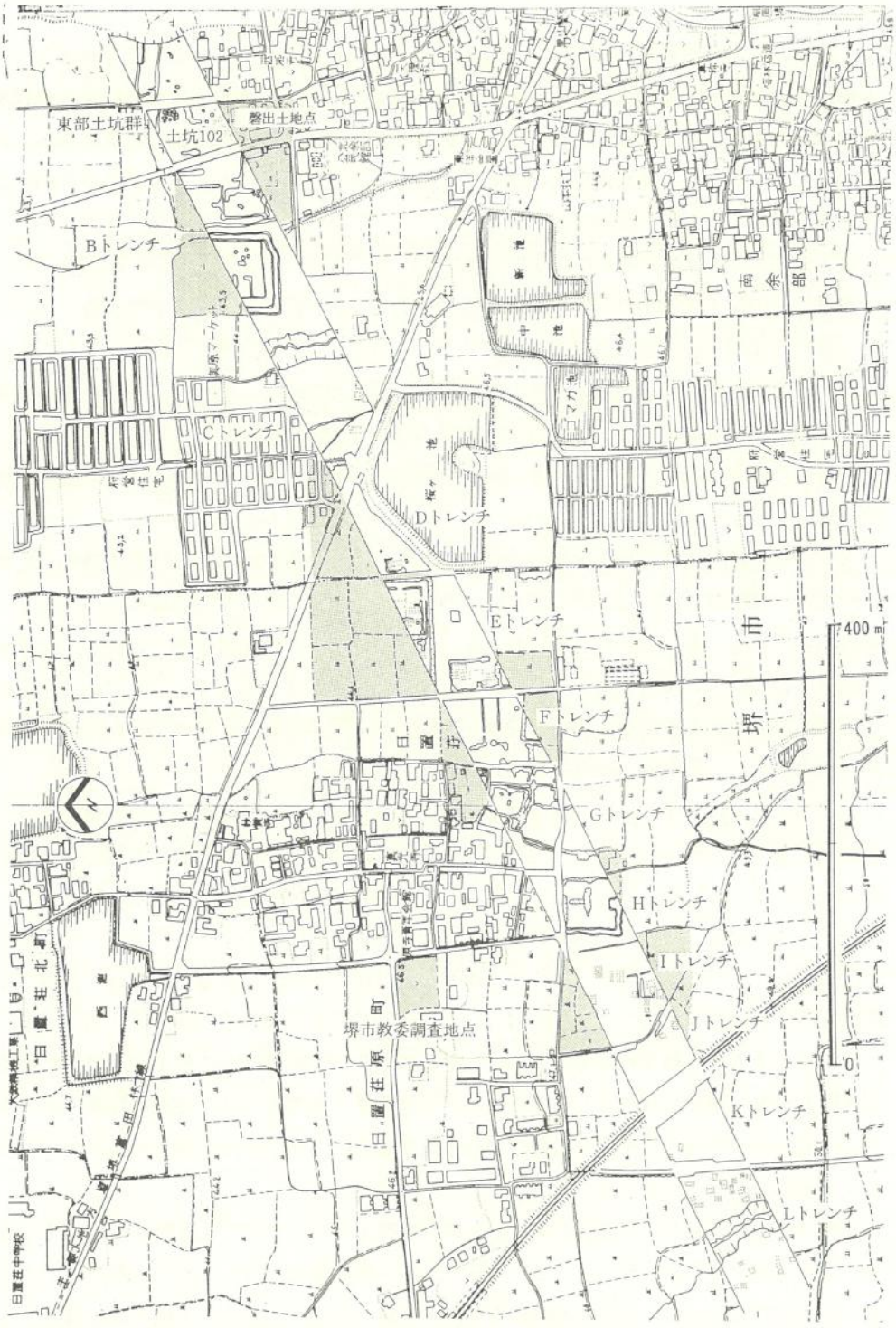
的な視野で描かれる中世の様々な土地空間において、その開発形態と村落個々の発展段階が多様であることを重視するところにある。そのため、個別事例の分析から一般化した議論を展開するよりも、歴史地理・文献史料・絵画および野外調査などを用いて、「地形の歴史的な解読を行い、集落の設定と耕地の開発を跡付けた上で、中世の村落景観を個別的に復原」することが重要な指向とされる。なによりも「村落民の生活の場というきわめて具体的な枠組の認識」がなければ「彼らの生活（共同体なかんずく村落共同体）の実相にせまることは」考えられないであろう[36]。そしてこの方法はまた、地表に遺されたあらゆる歴史地理的条件と文献・絵画史料を中世村落の景観復原の資料としているため、それらの様々な組合せから表現される村落の特徴を、考古学が用いる様式論的方法と対比して検討することができるのではないかとも考える。

そこで小稿はこの前提に立ち、考古学の基本的な方法を吉岡康暢氏による北陸の初期荘園を対象とした分析[37]にならいながら、その村落の社会的存在を示しうるものとして、立地・領域・再生産原理・構成員・生活相などのあらゆる環境を考慮した遺跡の景観復原を試みるものとしたい。対象とする地域は大阪府の河内南部であり、地域におけるマクロ的な整理は既に別稿でおこなっているため[38]、ここではその中でも特に日置荘遺跡に注目して考察を進めることにする。

Ⅲ．日置荘村落の空間構造[39]

日置荘遺跡は堺市東北部の日置荘西町～原寺および美原町西部の北余部に所在する。立地はおおむね平坦な中位段丘上にあたり、東端部のみ西除川へ向かって下降する斜面部と谷底平野をもつ。遺跡は奈良時代以降の特に鎌倉～室町期の集落跡を特徴とする。東西約1.2㎞の範囲全面にわたって検出された建物群は、そのほとんどが区画溝を伴っており、その単位は18カ所以上にのぼる。なかでも最も規模の大きな区画は、Eトレンチで確認された東西1町を測るもので、周囲には幅5m、深さ0.9mの溝がはしる。また調査区東部のBトレンチでも、幅7m、深さ1.5mの溝で区画された1町区画に準ずる規模の屋敷地が検出されている。これらは共に土塁の存在した可能性が考えられる。また調査区中央部では区画溝の連続する状況がみられ、これらは大量の瓦と瓦製仏具の出土から、寺院の一部である可能性も考えられる。

一方遺物も、遺跡の全面にわたり、奈良時代から室町時代までほぼ連続した様相をみせて出土している。瓦器碗・土釜・東播系擂鉢および中国製陶磁器から構成されるその組成は、基本的に河内でみられる一般的な組成の範疇におさまるが、東海・瀬戸内などからの流通量の少ない陶器類を使用していた点はこの村落の住人の特徴を示す手がかりとも言え



第1図　日置荘遺跡全体図

る。

このように、日置荘遺跡の各地点で検出された遺物と遺構は、ここに中世を連綿と続いた村落があったことを示している。しかし同じ場所での営みが繰り返された結果、前代までの多くの遺構は削平されてその姿を消し、出土する遺物の年代が連続して捉えられるにも関わらず、現存する遺構の多くは、16世紀中頃と推定されるこれらの村落の最終的な景観を表すにとどまっているのである。

盛土造成を伴なう機会の少ない中世村落において、遺跡の多くはこのような状況にあり、その結果、遺構と遺物それぞれの精緻な分析が試みられながらも、両者の整合性が十分でない復原を余儀なくさせられてきていることは、やむを得ない状況と言える。しかしそれではそのような切り合い関係に限定した断片的な遺構の変遷と、細分化の著しい土器編年の組み合わせ以外に、この錯綜する中世後期の村落景観の陰に隠された13・14世紀およびそれ以前の状況を復原し、古代以来の開発の経過と村落の変遷の様相を示す方法は無いものであろうか。

ところで、河川・谷部などを除く立地において、多くの遺物はたとえ時期の異なった資料が混濁した状態で出土したとしても、それは、それ以前にあった生活遺構が、度重なる景観の変更により削平されたり整地層となった後に包含された結果であり、決して無意味な混入などではないはずである。それはむしろ必要な手続きを経ることにより、それぞれの時代において、どのような規模の屋地がどのように配置されていたのか、をものがたる要素を内在していると言えるのではないだろうか。

そこでここでは、それを検討するために、はじめに基本的な遺物の不可避的移動距離を10m以下と仮定することによって、包含層も含めた遺物の時期別種類別分布図を10m方眼で作成することにした。しかしこの作業では出土遺物の位置は純粋な2次元的なものであって、それらが連続した分布を示す場合、またそれらが点在していた場合においても、それを使用していた元の屋敷地の配列および規模などは反映できないままで終わってしまうことになる。

そこで次にこの問題を解決するために、さらにこの作業に追加する形で、時期毎に種類別資料の定量的整理もおこなうことにした[40]。中世を通じて無作為的な遺物の移動があったとしても、かつてあった任意の屋地の中心地を推定させるかたちで、遺物の量の傾向が示される可能性を考えたのである。

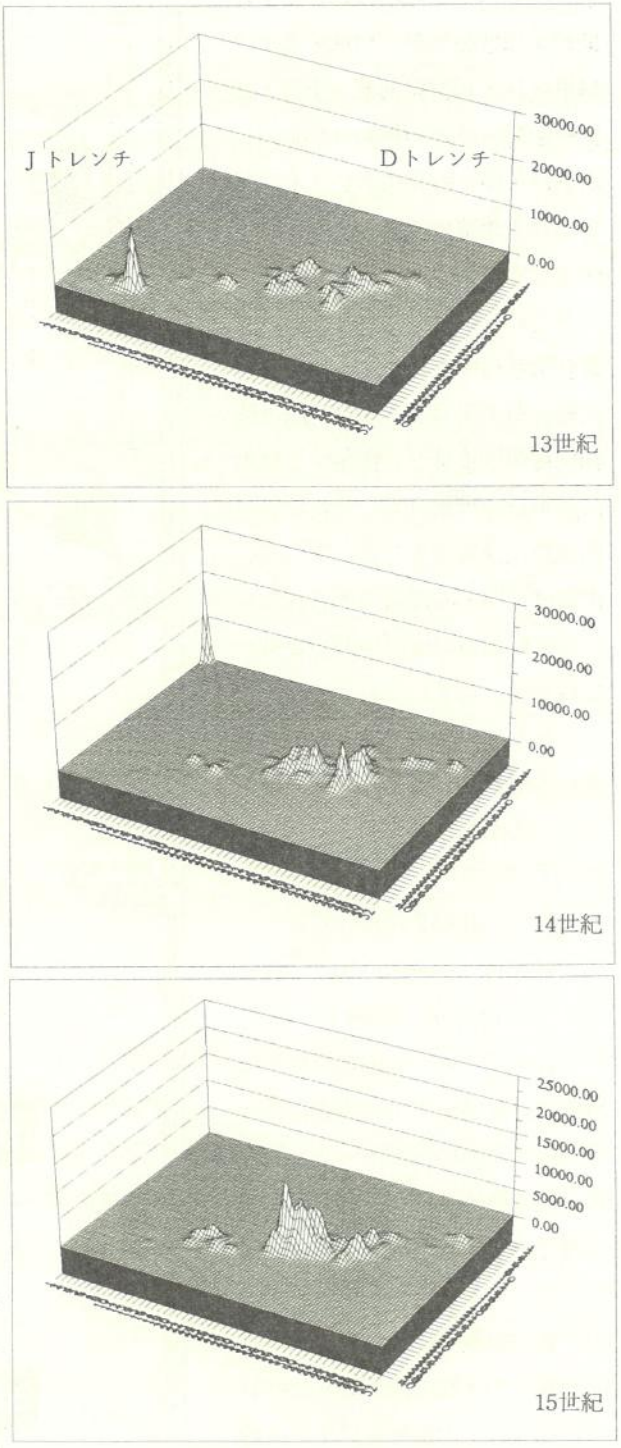
計測は、対象としている遺跡が中世の全時期に及んでいるため、中世後期に消滅する椀類ではなく鍋・釜を軸においた。またそれが消滅・廃棄を前提としている消費遺跡出土の中・大型品であるため、口縁部計測法または破片数の計測ではなく、重量集計を優先的なものとした。計測した資料はD～Jトレンチ出土の全てにおよび、時期区分は11～16世紀

の間で遺跡の変遷を物語るに必要十分な概ね1世紀単位、分類は碗・皿（黒色土器、瓦器）、釜（土師器・瓦器）、甕（東播・瓦器・常滑・備前）、擂鉢（瓦器・東播系・備前窯）とした。

このうち生活具として最も鋭敏な指標である釜に代表させて、時期別重量の空間変移を第2図に示した。集落の中心が、12世紀におけるI・Jトレンチから、13・14世紀においていくつかのピークをみせながらD・Eトレンチへ移っていくことがわかる。

次にこれらの資料から時期毎の屋地の配置と規模を復原しなければならない。この時、先に述べた重量分布の複数のピークが意味をもってくる。すなわち、先に作成した10m方眼の時期別種類別重量図からそれぞれのケースでピークとなるポイントとゾーンを抽出し、それらを時期毎に重ね合わせた時に整理される単位を調整した時、それらのピークポイントまたはゾーンがもっとも当時の屋地単位に相応しいものと考えたのである。さらにピークポイントとゾーンによる屋地単位分離の困難な13世紀代については、井戸の配置も考慮にいれるものとした。

これらの作業と遺構の変遷を組み合わせによって復原されたのが

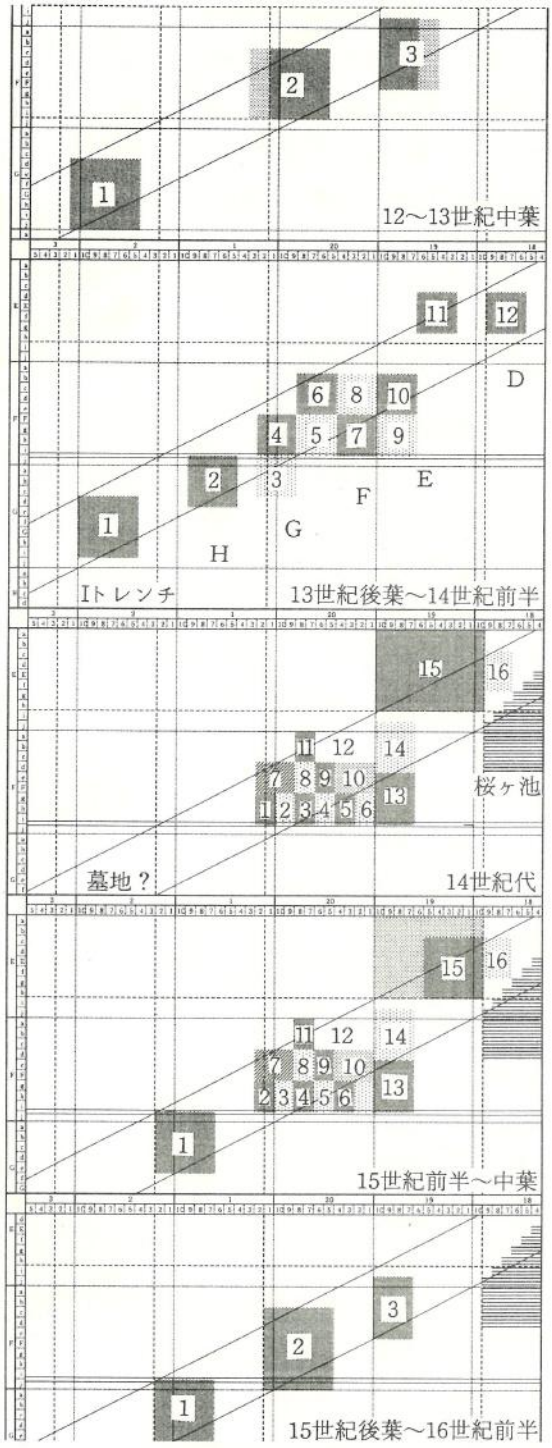


第2図　土釜の重量にみる分布の変遷

第３図である。時期は11世紀・12世紀・13世紀後葉～14世紀前半・14世紀代・15世紀前葉～中葉・15世紀後葉～16世紀中葉に区分され、遺構の不明な時期においても、推定される集落の位置と規模を想定することができたものと考える。

さて、このように整理された日置荘遺跡の中央部であるが、さらに前作業で集計した10m方眼の時期別種類別重量を、推定する屋地区画単位に再集計し、それを最少個体数に換算することによって、次には土器・陶磁器に限られるものの、屋地毎の家財道具の定量が比較できることになるのである。

これを14世紀代でみると、推測される屋地は、規模においてＡグループ：600㎡（区画１～６・８・９・11）、Ｂグループ：1200㎡（区画７・10・12・16）、Ｃグループ：2000㎡（区画13・14）、Ｄグループ：12000㎡（区画15）に分けられる。このうち推定される屋地各々の敷地全てが調査されたと考えられるのは区画１～３・８～10・14の屋地である。なお屋地の全面積に対する調査面積の比が著しく低いこと、屋地の領域が未確定な要素を残すことなどにより、区画６・10・12は除外されなければならない。またそれ以外の屋地についても任意の数値補正が必要



第３図Ｄ～Ｉトレンチの集落変遷（破線は条理地割）

第1表　屋地区画別の最少個体数

11世紀	1	2	3
面積(10㎡)	37/40	25/36	20/30
黒色土器椀	1.637	1.742	1.533
土師器皿	0.278	3.056	1.667

12世紀	1	2	3
面積(10㎡)	43/49	46/49	30/49
土師器皿	23.06	1.944	6.667
瓦器椀	17.98	5.561	0
白磁椀	2.083	1.939	0.868
土師器釜	0.101	0.136	0
東播擂鉢	0.928	0.06	0.447
東播甕	0.02	0.154	0.301
常滑甕	0.151	0.415	0.37

16世紀	1	2	3
面積(10㎡)	36	70	20
青磁椀	2.204	6.845	2.274
土器釜	1.744	5.125	3.634
土器擂鉢	2.343	3.484	2.886
備前擂鉢			
土器甕	2.39	10.43	0.215
備前甕			

13世紀	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
面積(10㎡)	33/36	23/25	8/16	16	16	11/16	8/16	16	5/16	16	15/25	16
土師器皿	93.61	23.33	46.11	39.72	6.389	0.556	3.333	13.06	12.78	8.611	26.39	8.889
瓦器椀	159.1	63.81	12.09	15.53	25.4	22.95	3.213	17.14	36.84	5.853	21.81	7.613
青磁椀	2.97	0.255	0.441	1.23	2.251	2.065	0.418	1.114	1.961	1.949	1.206	0
土師器釜	17.03	4.283	1.872	2.736	4.262	3.475	1.557	2.943	3.342	6.255	2.241	0.217
東播擂鉢	2.276	1.297	0.137	2.251	0.481	1.022	0.163	0.979	1.795	3.286	0.747	0.494
瓦器甕	0	0.005	0	0	0	0.262	0	0.064	0.575	0.825	0.14	0
東播甕	0.403	0.078	0.026	0.082	0.081	0.161	0.049	0.065	0.288	0.095	0.197	0
常滑甕	0.209	0.272	0	0.15	0.193	0	0.003	0	0.17	0	0	0

14世紀	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
面積(10㎡)	6	6	6	3/6	2/6	6	11/12	6	6	12	3/6	17/20	6/20	20	30/121	9
土師器皿	0.563	20.51	8.028	1.127	0.282	0	21.69	9.296	7.887	74.79	17.89	10.42	69.3	93.24	67.55	13.8
瓦器椀	5.839	20.19	3.771	1.703	0.243	0	17.4	14.23	12.9	26.7	58.64	14.36	103.1	82.36	73.78	19.95
土師器釜	0.028	2.512	2.372	1.788	0.297	0	3.898	5.455	7.523	2.747	2.012	3.299	10.33	17.93	4.265	1.799
瓦器釜	0.356	1.759	1.071	0.325	0.302	0	1.315	7.006	4.624	0.746	1.4	0.456	4.605	8.629	1.55	0.385
瓦器擂鉢	0	0	0.334	1.384	0	0	0	0	0	0	0	0.054	0.412	3.031	0.733	0.939
東播擂鉢	0.172	0.161	0.459	0.103	0.08	0	1.073	0.539	0.361	0.195	0.826	0.66	1.939	2.433	1.744	0.593
瓦器甕	0.205	0.838	0.993	0.67	0.047	0	0.42	1.429	1.79	0.199	0.004	0.19	0.578	1.717	0.376	0.486
常滑甕	0.071	0.577	0.441	0.214	0.099	0	1.192	0.297	0.401	0.303	0.113	0.13	0.243	0.72	1.639	0.224

15世紀	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
面積(10㎡)	33/36	6	6	6	3/6	2/6	11/12	6	6	12	3/6	17/20	6/20	20	30/121	12
瓦器釜	7.677	0.06	13.54	9.342	8.117	1.836	3.409	10.48	9.271	3.664	2.422	1.303	2.922	8.808	2.185	2.043
瓦器擂鉢	3.809	0.078	7.725	6.552	4.497	1.104	3.92	7.371	5.996	0.688	1.647	0.395	2.059	8.17	1.12	0.165
備前擂鉢																
瓦器甕	1.261	0.177	2.17	3.963	1.754	0.104	1.369	1.501	2.939	0.6	1.845	0.199	0.516	5.775	0.429	0.084

ではあるが、その結果以下のような傾向がうかがわれそうである。

まず、Aグループを基準とした場合、面積が2倍規模のBグループは、しかし生活人数は同規模で、土製の椀・皿も面積比率同様2倍の消費を示す。一方、Cグループは面積がAグループの約3倍であるのに対して、生活人口は5倍、土製椀・皿の消費は10倍にのぼる。A・Bグループに対して面積当りの生活人口比は高く、土製椀・皿の消費も2倍である。またDグループはCグループに対し6倍以上の面積を有しているにもかかわらず生活人口が同規模であるため、その差はAグループの単位人口当りの面積に対して4倍の広さを示すことになる。また土製椀・皿の消費も、Aグループの単位人口当りの値に対して6倍の数値となっている。余剰空間と余剰生活材に関してAグループとDグループは少なくとも4倍以上の差がみられることになるのである。

一方重量個体数分析に反映されない資料については、器種別の出土分布から検討を加えてみた。このうちこの時期に関係する資料は山茶碗・常滑窯系擂鉢・石鍋と石臼・土師器京都型皿の一部・瓦器仏具類・瓦器火鉢の一部である。これらの資料から特に偏りの分布と区画との関係をみれば、山茶碗は区画14・15のC・Dグループ、常滑窯系擂鉢はC・Dグループと区画7以降の東西道路に面さない区画群、土師器京都型皿はDグループでもみられるものの、分布の中心は区画7と2・8にある。瓦器火鉢についても同様な状況がみられ、仏具についてもC・Dグループ以外に区画8での出土をみることができる。

以上、出土資料の最少個体数と分布の遍在傾向から、屋地と推定される区画毎の特徴を整理してきた。その結果、最少個体数の分析によって、従来行われてきていた建物の規模と組合せと別に、居住者の質的区分が、Aグループを基準とした余剰空間と余剰生活材の数値によって表現できたものと考える。

例えばC・Dグループは屋地の規模では6倍以上の差があるが、保有している家財道具の傾向は、類似した状況であった。またA・Bグループは、当初みられた土師器皿個体数の不統一性が、区画7を中心とした2・8のグループとそれ以外といった区分に説明され、さらに東西道路に面する群と面しない群でも区分できることが推測された。そして数量分析以外の遺物の分布により、C・Dグループでは東海系などの特定流通品が、区画7を中心とするグループでは仏具・瓦器火鉢の分布に特徴を示している可能性が指摘できるものとなった。

したがってこれらの状況より復元されるこの村落は、東西道路に面した群を最小の単位、その4～6倍以上の家財を隔差にもつ区画15を最大の単位として、規模は異なるものの存在形態としては区画15に近似した立場の区画13・14と、中間層としての、東西道路に面さない一群、および火鉢などに特徴を有する区画7を核とした群の5群が、階層的にまたは役割を分担して集住していたものと推定されるのである。

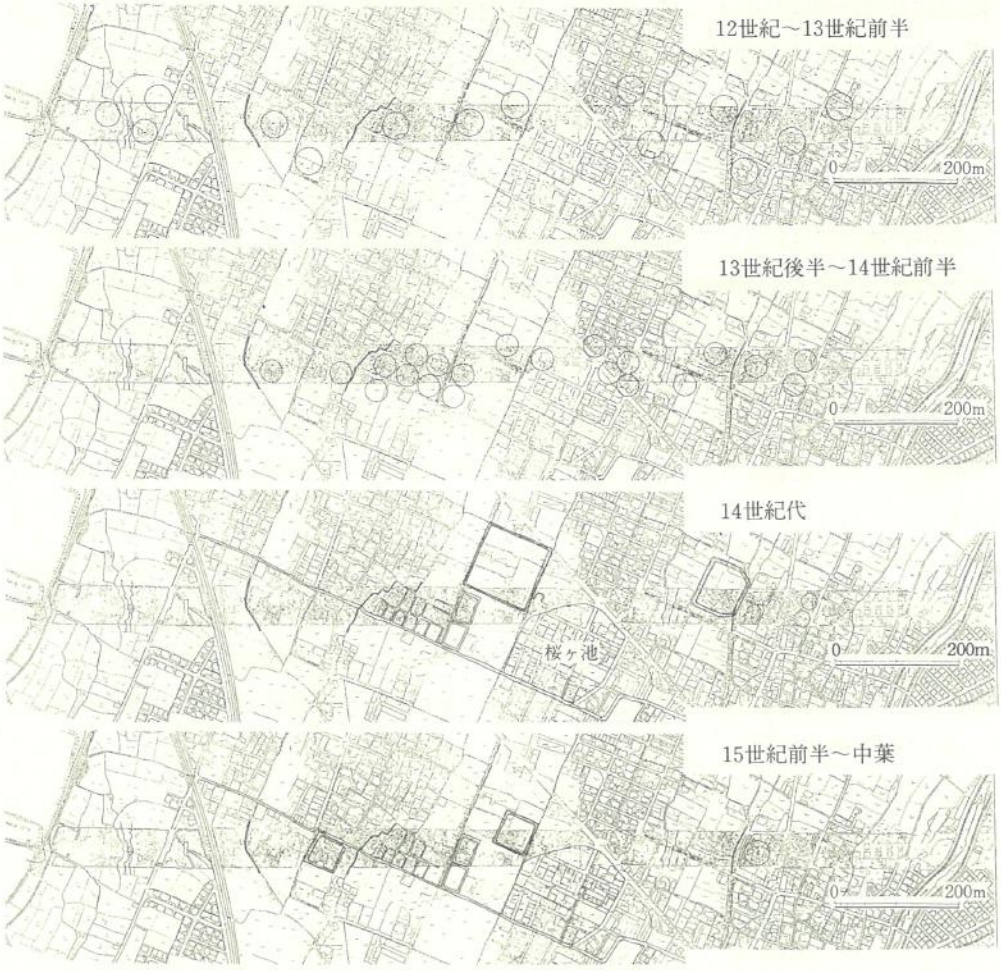
さて、これまで日置荘遺跡のなかでも特にD～Jトレンチに絞って検討を進めてきたが、これまでの整理を前提として遺跡全体を見たとき、その状況はどのようなものとなるだろうか。

［12世紀］

D～Jトレンチでのこの時期のあり方は、条里単位に配置された集落の状況であった。一方A～Cトレンチでは6カ所において遺物の分布のまとまりが確認できた。これらの資料はいずれも包含層からの出土であり、地形とその後の土地利用によりある程度の移動を考慮されなければならないものである。しかしそれを前提としてもなおこれら6カ所の群がそれぞれ条里の交差部に近い位置または条里線に近い位置でみられることがわかる。

［13世紀］

D～Jトレンチで復原された集落の配置の特徴は、条里単位を越える形での集落の集合



第4図　日置荘村落の変遷（○は集落の概略の規模）（右上が北、右からAトレンチ）

状況であった。A～Cトレンチにおいてもその傾向はみられ、前代の集落位置を踏襲するものと、2カ所その関係を越えて集合する状況が認められる。このうちD～Jトレンチの集合した集落の個々の規模は概ね1600㎡（約500坪）、集落数は約7である。またA～Cトレンチでは、西の集合が集落数は約4または5で個々の規模は900㎡程度（約300坪）、中央から東よりの集合が集落数は約4または5で個々の規模は900～1600㎡（約300～500坪）と考えられる。また集合間の距離はおよそ1町半程度である。

なおこの時期の日置荘村落を特徴付けるのは鋳造工人の存在である。すでにD～Jトレンチにおいてはその検討が加えられているが、やはりA～Cトレンチでも断片的ではあるが、Cトレンチ西端とAトレンチ西端で関係する資料が知られている。

［14世紀］

D～Jトレンチでは1町規模と推定される屋敷を中心として複数の面積からなる屋地が階層的な村落景観を示すことになった。規模を繰り返すと12000㎡程度（約1町）が1カ所、2000㎡程度（約600坪）が2カ所、1200㎡程度（約360坪）が2カ所、600㎡程度（約180坪）が9カ所である。いずれも屋敷地の境界には溝がめぐらされ、なかでも1町規模に推定される屋敷地は幅5mの溝が南辺を出入口として設けられている。またその南に連なる2000㎡規模の屋地は東に出入口をもち、共に空閑地を通路として共有している。一方これらの西側に配されている600㎡規模の屋地は南辺を道路に面し、さらに路地が設けられてその奥に位置する1200㎡規模の屋地へつながっている。遺物の内容と定量分析によりそれらが個々特徴的な様相を示している点はすでに述べた。

A～CトレンチではBトレンチの大形屋敷を中心とした景観が復原される。発掘で明らかにされた南面及び東西辺の一部の状況及び地下探査調査の成果を基に復原すると、その平面形は四周を条里線からほぼ等間隔で控えた不定形な6角形であり、その意味で規模はほぼ1町に準ずるものと評価できよう。出入口は東に設けられており、D～Jトレンチの状況と同様に、出入口から1町の範囲に関連する屋地を配している。これらの規模と構造については資料整理の状況によりD～Jトレンチ程には復原することができないが、概ね出入口に面する屋地は2000㎡規模が2カ所、さらにその東側の屋地は600㎡規模が数カ所推定できるものと考える。なおE・Bトレンチの2ヵ所の大形屋敷の距離は約2町である。

［15～16世紀中葉］

A～CトレンチではBトレンチの屋敷地が消滅し、この時期の集落は1カ所となる。同様にD～Jトレンチでも前代において1町規模を持った屋敷地が規模を縮小し、別に同規模の屋敷地が出現する。A～Cトレンチの場合は明らかに村落の中心が移動したものであり、隣接する地理的条件においておそらく同様な状況がD～Jトレンチの村落に生じたものと考えて大過無いものといえよう。

例えばD～Jトレンチでは Eトレンチの縮小した屋敷地と同規模のHトレンチ屋敷地が出現し、そこでは多量の鋳造関係遺物がみられる。これまでの日置荘村落の変遷は、古代以来西から東への移動をひとつの傾向としていた。したがってこの区画はそれに逆行するものであり、その意味でこの区画の成立は、従来の住人と関係の薄い新興の住人に代表される村落移動を原因としているものかもしれない。

さてこの時期の状況を説明するのに最も適した視点は近世村落との関係であるが、両者の景観を較べるとそこに村落の根幹に関わる大きな違いをみることができる。それが道路の軸である。古代以来日置荘村落を貫徹した景観は、一部を除き和泉と大和を結ぶ東西道を基準としていた。そしてこれは単にこの遺跡近辺に限られた状況ではなく、広く丹南において看取される状況でもあった。しかるに近世村落の景観は、東西道よりも現在の原寺地区を縦断する南北道に沿って形成されているのである。中世から近世への転換期を経て、かつてのメインストリートは脇道に転化してしまい、当然それに付随していた屋地群とその立地は、村落の中心から縁辺へ立場を変えていったのである。

この交通路の転換を担った原動力が河内・和泉をめぐる戦国期の社会情勢であったことは想像に難くないが、この問題について詳細に検討加える余裕は今ここには無い。丹南地域で考えられるひとつの可能性としておきたい。

このように日置荘遺跡をとりまく村落の景観は、11・12世紀代においては原則的に条里を単位とする形で集落が点在する小村散居型から、13世紀代は前代の個々の集落規模が縮小する一方で、屋地の集合が数カ所でみられる塊村への変化に見ることができよう。

一方14世紀代は、前代にみられた屋地の集合の一部が1町規模の屋敷となり、それを中心に階層的な集合が2カ所でみられる。おそらくこの調査範囲の中に類似した2つの村が存在したと考えていいのではないだろうか。このうちEトレンチを中心とする村は、東西道路を基準としており、築造時期が未確定ではあるが、その再生産原理の源として桜ケ池の存在を想定することも可能ではないかと考えている。一方Bトレンチを中心とする村は、南北道を基準とし、東は西除川に接する。

ところで村落の構成要素にあった領域と墓の説明がまだ不足していた。今13・14世紀代におけるその景観を整理すると、Eトレンチの村の場合、13世紀代の墓は、剣池に近い西方のMトレンチで約25mの間隔をおいて確認された3基の単独墓（土壙墓または木棺墓）としてみられ、14世紀代と思われる墓はIトレンチで前代の集落が移動した後に、集団墓（土壙墓）としてみられる。

これらの状況を村の変遷と対比させると、前者は各個の自立性を失っていない独立集落の個々の墓、後者は中心屋敷の下でまとめられた小規模屋地群の墓であり、村の移動に合わせて墓も移動したものと考えられるのであろうか。ちなみにDトレンチからも土壙墓と

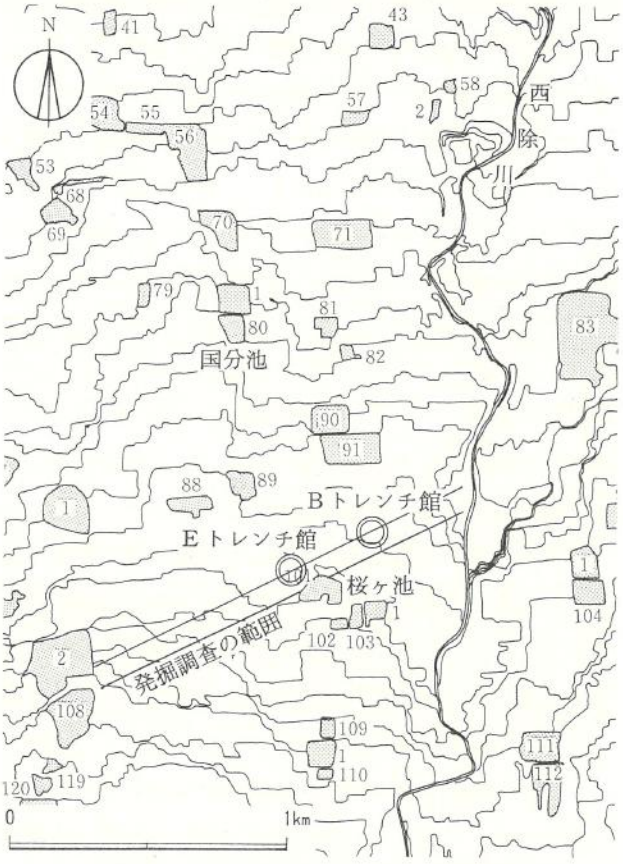
考えられる13世紀代の土坑群が検出されており、同様な視点でみると、これはＢトレンチを中心とする村の前代における墓地であり、とりもなおさずそれがその村の西の境界に対比されるものとも考えられる。

したがってこれらの村の東西範囲は、自然地形と墓を条件とするならばＡ～Ｄトレンチと Ｄ～Ｍトレンチの間に復原できることになる。

一方で南北の範囲はどのように推測されるのであろうか。その条件は村の領域がもつ意味から考えてみたい。一般論として村の領域の大部分を占めるのは耕作地であろう。そこで村の領域の代わりに耕作地の範囲を考えるとすると、それを規定するもっとも大きな要素は水利である。したがってその村が農耕を生業としているのであれば、その範囲はやはり水利によって多くが決定できることになる。

一方瀬戸内式気候と南から北へ傾斜する自然地形において、この地域の水利は水源である狭山池および西除川からの用水路とため池を基にしている。この前提においてＥトレンチの村をみれば、この村の水利としてもっとも都合の良い存在がＤトレンチの桜ケ池になってくる。既に述べたようにこの時期における桜ケ池の存在の検証は未確定のままであるが、仮にこの時期に存在したとするならば、この村の耕作域は桜ケ池の水利範囲に求められることになると言えよう。

そこで桜ケ池と周辺の地形の関係をみると、桜ケ池より東がＢトレンチを中心とした隣村の領域とすれば、その供給域はこの池から西側に規定することができる。ところが地形の細部によれば、この池の西は約１町の幅で浅い谷地形がはしり、さらにその西は尾根状地形となっているのである。そのため条里地割に沿った水路をつくった場合、水はこの稜線上部分で西から東へは流れるが、桜ケ池から谷地



第５図　水利と地形にみる14世紀代の景観

形を越えて水を西流させる場合には、その比高差にしたがって少なくとも1町以上北へ離れた位置に導かなければならないのである。したがって、その取水口の位置にもよるが、桜ケ池を源流とした場合、その供給域は、この条件によって西へ条里地割を基準として階段状に北上する範囲を、少なくとも3町にわたって示すことができることになる。

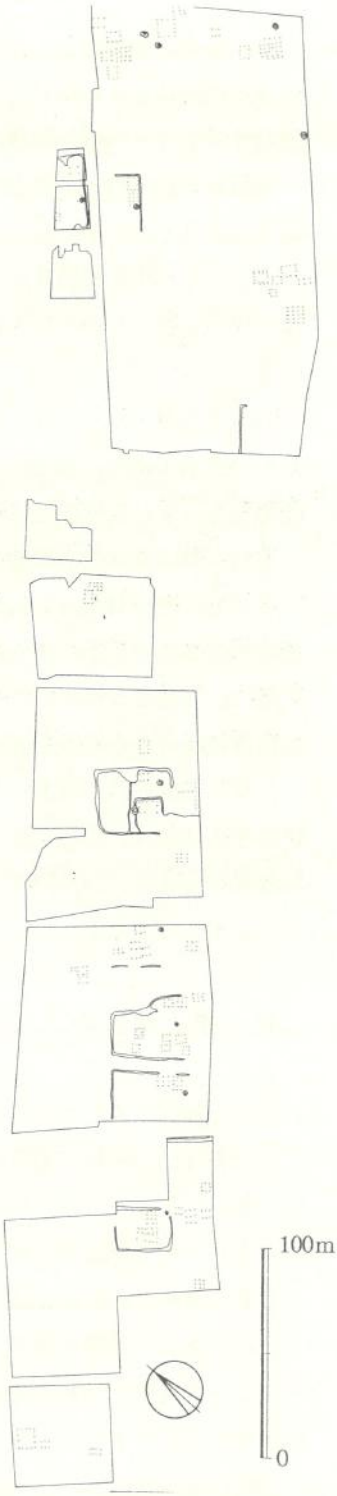
そしてその北限であるが、桜ケ池の北約1kmには国分池がみられる。この池は谷地形を利用してつくられたものであり、名称からも中世を起源とする可能性が高い。つまりこの池はまた別の耕作地（別の村）へ水を供給する水源であったと推定されるものであり、その結果Eトレンチの村の耕作地および北の領域は、ここに比定できるものと考えられるのである。

このようにEトレンチの村は桜ケ池の存在を仮定するならば、東西6町以上南北10町を領域とするものであり、そこに格差をもった16の屋敷地が集合していたものと表現されることになる。それではこのような景観を示すEトレンチの村は、地域においてどのような社会的存在であったのであろうか。

この問題について最初に気がつくのは、同じ農村でありながら、この村の風景が下右田遺跡のような概ね1町の間隔で屋敷が点在する景観とは全く異なっている点である。しかもそれがこの地域のこの時代における特徴であるかというと、それはそうではなく、観音寺遺跡[41]の場合はむしろ下右田遺跡に近い景観を示しているのである。

すなわち、前代のありかたとの関係において、同じ地域内においても集合しなければならなかった村と、その必要のなかった村の、普遍化しうる2種類の形態が存在することになるのである。

これはとりもなおさずその時にそれぞれの村が担っていた地域内での役割の違いを示すものと考えられるのであるが、その具体像について今ここで述べるにはまだ経なければならない手続きが多く残されている。



第6図　下右田遺跡における室町時代の景観

ただしその前段階としていくつかの要素をみれば、Eトレンチの村は和泉から大和へ向かう東西道路をその集合のひとつの軸にしていることは明かであり、その点でこの街道を通過する人々との強い関係はこの村を規定する大きな要素になるだろう。

中世において村々を通過する人々は、職人・商人に代表される。河音能平氏が復原した職人の姿はその一例であるが[42]、商人と村との関わりについてもいくつかの論攷が加えられている。その中で藤田裕嗣氏は、商人の行動様式を整理することによって、生産地から集荷市場、交換のための商人宿、供給市場、消費地といった村に与えられる性格を指摘している[43]。

広域な流通に対しては、それを裏付ける資料が当遺跡から出土していることは既に指摘している点であり、おそらくEトレンチの村についてもこれらの機能のうち、いずれかの性格をもっていた可能性は高いものと考える。

またこのような村落形態の違いと内部の構造実態については、伊藤裕久氏の研究が参考にされる[44]。氏の対象とした菅浦は16世紀以降に乙名層の定着によって完成された東村と鎌倉時代に成立のさかのぼる西村に分けられるが、特に西村の14世紀から16世紀にかけての変遷は、日置荘遺跡の15世紀以降の状況だけでなく、ひろく知られている区画溝の連続する村落景観の成立原因を説明する大きなてがかりとされよう。

ただし14世紀代の状況については、従来から言われているような在家と脇在家の構図に換言する以前に、ここでおこなった定量分析による屋敷間の格差の意味、および隣接する村落間の関係[45]を、14世紀だけでなくその前後の時代を通して検討した後に、改めて発言したいと考えている。

Ⅳ．まとめにかえて

すでに述べてきたことであるが、考古学の方法で村落を研究する際に、これまで不足していた要件は、それが集落にとどまり村落全体をみていなかった点、村落と館が別の立場から整理されていた点、村落が個別分散的にあつかわれ、地域との関わりがとらえられなかった点そして普遍化の前に実態の把握が二義的な位置におかれていた点などであろう。

日置荘遺跡の検討はこれらの課題を克服すべく試みたものであるが、明らかにしえた点と同時に多くの課題も積み残したままとなった。特にその軸となる景観復原の目的は、それによって現象を普遍的に説明するためではなく、個々の実態に接近することにより、多様な中世像を浮かびあがらせ、あらためてそれを普遍化しうる社会構造の説明をおこなうところにある。

そのために、考古資料の徹底した検討が必要なことは言うまでもないが、積極的な学際

研究が必要不可欠であることは、これまで以上に強調しなければならない点であろう。住人の一端にあった河内鋳物師との関連を含め、諸先学のご叱正とご教示をいただくなかで、稿をあらためて考えることにしたい。

最後になったが、筆者の力量不足から、時代性およびかつてより研究史で必ずとりあげられる著名な集落遺跡だけではなく、近年報告の増加している重要な遺跡についても[46]、下記をはじめとする各地の方々から貴重なご教示を賜りながら必要な検討を加えることができなかった。記して謝意をあらわすと共に深くおわびを申し上げます。

浅野晴樹・荒川正夫・飯村　均・伊藤裕偉・井上裕一・岡田章一・小野正敏・工藤清泰・桑畑光博・越田賢一郎・坂井秀弥・笹生　衛・柴田龍司・鈴木正貴・鈴木康之・高橋照彦・武田恭彰・田島明人・田中則和・徳永貞紹・橋口定志・服部敬史・松田直則・馬渕和雄・宮田進一・宮瀧交二・山口博之・横山哲英・吉岡康暢（敬称略・五十音順）

（大阪府文化財調査研究センター）

註

1）島田次郎ほか　「中世村落をめぐって－大会討議－」『地方史研究』49　1961

2）小山靖憲　「日本中世村落史の課題と方法」『中世村落と荘園絵図』　東京大学出版会　1987

3）橋本久和　「中世村落の考古学的研究」『大阪文化誌』1巻2号　1974

4）原口正三　「古代・中世の集落」『考古学研究』92　1977

5）奥野義雄　「中世集落と住居形態の前提をめぐって」『大阪文化誌』2巻3号　1977

6）石神　怡　「各地の古代末から中世に至る遺跡について」『和気』和気遺跡調査会　1979

7）坪之内徹　「中世における墳墓と葬制(5)」『摂河泉文化資料』6－5　1981

8）中井　均　「中世城館の発生と展開」『物質文化』48　1987　畿内以外では鋤柄俊夫　「長野県の中世集落遺跡について」『長野県考古学会誌』50　1986。橋口定志　「中世方形館を巡る諸問題」『歴史評論』454　1988。太田三喜　「中世末期における居館の様相」『天理大学学報』第157輯　1988。飯村　均　「陸奥南部における中世村落の様相」『奥田直栄先生追悼集』　1989。吉岡康暢　「北東日本海域における中世陶磁の流通」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集　1989。水藤　真　「村や町を囲むこと」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集　1989。千田嘉博　「村の城館をめぐる五つのモデル」『年報中世史研究』第16号　1991。森　格也　「瀬戸内地方の中世集落の展開」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅰ　1993。本堂寿一　「岩手県における中世城館の調査成果と課題」『北上市立博物館研究報告』第9号　1993。室野秀文　「厨川の中世初期居館」『岩手考古学』7号　1995　および、鋤柄俊夫　「都市城郭研究の最新情報　近畿」『都市空間』　新人物往来社　1994など。

9）広瀬和雄　「中世への胎動」『岩波講座　日本考古学』6　1986

10）佐久間貴士　「中世の開発と集落」『歴史科学』99・100合併号　1985　「畿内の中世村落と屋敷地」『ヒストリア』第109号　1985　また畿内以外では坂井秀弥氏が広い視点にたった考察を進めている（「頸城平野古代・中世開発史の一考察」『新潟史学』第18号　1985）

11）橋本久和　「大阪府における中国陶磁器の出土状況」『貿易陶磁研究』No.1　1981。橋本久和　「高槻市上牧・宮田遺跡出土の中国陶磁器」『貿易陶磁研究』No.4　1989。佐久間貴士「大阪菱木下遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』No.4　1984。森村健一　「堺環濠都市遺跡出土の陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究』No.4　1989。鋤柄俊夫　「大坂城三の丸跡（1A調査区）の調査」『貿易陶磁研究』No.12　1992など。また宇野隆夫は土器類総体について詳細な分析から遺跡の個別性を提示している（「越中の国府・荘家・村落」『高井悌三郎先生喜寿記念論集　歴史と考古学』　1988）。

12）広瀬和雄　「中世村落の形成と展開」『物質文化』50　1988

13）島田次郎　「荘園村落の展開」『岩波講座　日本歴史』6　1963

14）関口恒雄　「中世前期の民衆と村落」『岩波講座　日本歴史』5　1975

15）佐久間貴士　「発掘された中世の村と町」『日本通史』中世3（岩波講座　日本通史　第9巻』　1994

16）金田章裕　『条里と村落の歴史地理学的研究』　大明堂　1985

17）山口県教育委員会　『下右田遺跡第4次調査概報・総括』　1980

18）中井　均　「中世の居館・寺そして村落」『中世の城と考古学』新人物往来社　1991

19）橋口定志　「中世東国の居館とその周辺」『日本史研究』330号　1990ほか

20）橋口氏が描いた溝の水利機能については、日置荘遺跡などでそぐわない事例もみられるが、ひとつのありかたとして西日本でも中世後期の連続する区画溝の機能説明の中に踏襲されている（石尾和仁　「中世低地集落の形成と展開」『ヒストリア』第138　1993ほか）

21）鋤柄俊夫　「畿内における土器・陶磁器の定量分析」『貿易陶磁研究』15　1995

22）奈良県立橿原考古学研究所　『法貴寺遺跡発掘調査概報』　1987（奈良県遺跡調査概報1986年度）

23）須田　勉　「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢』II　1985

24）坂井秀弥　「絵図に見る城館と町」『中世の城と考古学』新人物往来社　1991　「越後の道・町・村」『中世の風景を読む』第4巻（日本海交通の展開）新人物往来社　1995　他に伊藤裕偉　「中世後期木造の動向と構造」『Miehistory』Vol.7など　1994

25）松山　宏　「中世都市研究の諸問題」『国史学』143　1991・「中世都市の条件について」『奈良史学』10　1992ほか

26）飯村　均　「中世の「宿」「市」「津」」『中世都市研究』第3号　1994。柴田龍司　「村落

型城郭から都市型城郭へ」『千葉城郭研究』第３号　1994。㈶千葉県文化財センター　『研究連絡誌』第37号（特集「小櫃川流域の中世遺跡」）　1993。宮瀧交二　「中世「鎌倉街道」の村と職人」『中世の風景を読む』２（都市鎌倉と坂東の海に暮らす）新人物往来社　1994。斉藤　弘・進藤敏雄　「北関東における中世集落遺跡について」『研究紀要』第３号。㈶栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1995。荒川正夫　「中世における「周溝に囲まれた小型建物址」の問題について」『翔古論聚』1993

27）前川　要　「中世集落の動向と流通機構の再編」『中世の城と考古学』新人物往来社　1991。

28）石母田正　「辺境の長者」『歴史評論』92・95・96　1958

29）矢田俊文　「中世後期越後国の集落に関する二つの課題」『かみくひむし』第80号　かみくひむしの会　1990　「中世越後における集落の移動に関する一考察」『新潟史学』第26号　1991

30）坂井秀弥　「越後の道・町・村」『中世の風景を読む』第４巻（日本海交通の展開）新人物往来社　1995。

31）山川　均　「条里制と村落」『歴史評論』No.538　1995　「書評　宮本誠著『奈良盆地の水土史』」『古代学研究』131　1995。石尾和仁　「中世低地集落の形成と展開」『ヒストリア』第138号　1993。また山本直人　「加賀能登における中世集落遺跡の農業経済基盤」『石川考古学研究会会誌』第33号　1990はその実態を分析している。

32）考古学協会1994年大会（同志社大学）での講演

33）宮下健司　「村落の空間構造と世界観」『信濃』第409号　1984。水野章二　「中世村落と領域構成」『日本史研究』271　1985

34）なおこの点に関して前川氏は「地域の中での都市という視点」の重要性を述べており、その表現はここで言う村落研究の見方に近いものがある。しかしその実践は従来の方法を出ることが無く、氏の指摘した視点が具体的にどのようなヴィジョンを描いているのかさだかではない。前掲書註27

35）原田信男　「中世の村落景観」『村落景観の史的研究』八木書店　1988

36）木村　礎　「展望」『村落景観の史的研究』八木書店　1988

37）吉岡康暢編　『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会・石川考古学研究会　1983

38）鋤柄俊夫　「中世丹南における職能民の集落遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集　1993

39）大阪府教育委員会・㈶大阪文化財センター　『日置荘遺跡（その１）』・『日置荘遺跡（その２）』・『日置荘遺跡（その３）』・『日置荘遺跡（その４）』　1988・『日置荘遺跡（その５）』　1989・『日置荘遺跡（その２－２・その６）』　1990・『日置荘遺跡（その２－３・６－２）』　1991。鋤柄俊夫・亀井　聡　「日置荘遺跡その２調査区の景観復原」『大阪文化財研

究』第7号 ㈶大阪文化財センター 1995。鋤柄俊夫 「日置荘遺跡の空間構造」『大阪文化財研究』第8号 ㈶大阪文化財センター 1995。鋤柄俊夫 「畿内における土器・陶磁器の定量分析」『貿易陶磁研究』No.15 1995

40）村町都市などの考察に定量分析が必要なことは従来より指摘されてきたところであるが、近年はそれまでの発想・視点・方法の異なる新しい研究が各地でおこなわれつつあり（宇野隆夫氏の方法および第15回貿易陶磁研究会報告など）、この方法もその一例に位置付けられる。

41）前掲書註38

42）河音能平 「鎌倉前期河内鋳物師の一風貌」『美原の歴史』3号（美原町教育委員会）1977

43）藤田裕嗣 「流通システムからみた中世農村における市場の機能」『人文地理』第4号 1986

44）伊藤裕久 『中世集落の空間構造』生活史研究所 1992

45）Dトレンチに注目すれば、Eトレンチの村は13世紀から14世紀にかわる時期でBトレンチの村の領域を侵犯したと見ることもできる。

46）畿内以外では、山形県遊佐町教育委員会 『大楯遺跡第3・4次発掘調査報告書』 1991。仙台市教育委員会 『中田南遺跡』 1994。富山県文化財振興財団 『梅原胡魔堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』 1994。埼玉県埋蔵文化財調査事業団 『堂山下遺跡』 1991。埼玉県埋蔵文化財事業団 『金井遺跡B区』 1994。早稲田大学 『大久保山』III 1995。早稲田大学 『お伊勢山遺跡の調査』 1994。愛知県埋蔵文化財センター『室遺跡』 1994。三重県埋蔵文化財センター 『多気遺跡群発掘調査報告書』 1993。高知県教育委員会 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』III 1992。佐賀県教育委員会 『本村遺跡』1991。都城市教育委員会 『丸谷地区遺跡群・上大五郎遺跡』 1995ほか。なお畿内については、鋤枝俊夫 「都市城郭研究の最新情報 近畿」『都市空間』（新人物往来社）1994も参照いただければ幸いである。